

九州における玦状耳飾について

上 田 耕

1. はじめに

縄文時代前期を代表する装身具の一つに玦状耳飾がある。これは中国古代の佩玉の一種である「玦」に類似していることから付けられた名称で、普通扁平、環状にして外縁から中央孔に達する切れ目が一ヶ所にある。⁽¹⁾

着装方法としては、ニューギニアのパプア、イゴロト族、フィリピンのイフガオ族、台湾のヤミ族などの民俗例により穴をあけた耳朶に切れ目を下にして挿入したと考えられる。⁽²⁾

その分布は汎日本的で海外においてもこれに似たものは、中国や台湾、東南アジアなど各地でも報告されている。素材については石製のものが一般的だが、関東を中心に少なからず分布する土製のものや、まれに骨製や貝製のものも知られる。

玦状耳飾に関するわが国での研究は明治44年、大野雲外氏が人類学雑誌第27巻5号に紹介したのが最初である。其の後、柴田常恵氏⁽⁴⁾によって日本の出土品と中国の玦とが類似していることについて注意を喚起されることになる。当時、玦状耳飾は石環とか玦様の石製品、石製玦などとよばれていて、必ずしも使用法が解明されていたわけではない。⁽³⁾

「玦状耳飾」の名が一般的になったのは、大正6年、大阪府藤井寺市国府遺跡の発掘が行なわれた際にたまたま遺存した人骨の耳もと付近で発見されて以来のことである。⁽⁵⁾

其の後、多くの人々によって研究が進められていったが、大正末期の梅原末治氏による研究が、わが国で最初の玦状耳飾の総合的研究と言われている。其の後の本格的な総合研究としてあげられるのは昭和8年、樋口清之氏によるものである。樋口氏は全国57ヶ所、83個の玦状耳飾を収集し、形態、材質、編年、分布、古墳時代の金環との関係などの広い角度から、解明を試みている。⁽⁶⁾

今日、資料の増加に伴い玦状耳飾は縄文時代前期を中心に、古いものは前期初頭に位置づけられ、その起源地については東日本とする説と大陸からもたらされたものとする説とに分れている。また前期初頭のもものは小型で円形の肉厚ないいわゆる金環形であり、時期が下降するにしたがって円形の扁平ないいわゆる玦状耳飾の典型的な形態へと変遷するものとされる。⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾そして、「中期以降になると円形であった形態や石製であった材質に変化を生じつつ激減していく。」とされ、すなわち、時代の推移によって形態や素材が変わって行ったとする説が生まれる。一方、これに対し単なる型式の展開により生じたバリエティに過ぎないとする説⁽¹¹⁾が存在する。このように玦状耳飾については疑問点未解明部分が数多く存在し、明解な定説に乏しいのが現状と言えよう。提起されている未解明の問題点を列記すると、

- ① 玦状耳飾の最古の型式はどのようなものか？
- ② 縄文時代前期に集中しているのはなぜか？
- ③ 大阪府国府遺跡の人骨に伴った事例から耳飾であることが証明されたと言われるが、首飾など、他の用途に用いられたことはなかったか？
- ④ 単に装飾としてのみ使用したのではなく呪術的、または社会的地位の表示として使用したのではないか？
- ⑤ 硬玉などの美しい原石の入手経路は？
- ⑥ 材質の相違が意味するものは何か？ 等々である。

また、Ⅰ. 多くの出土品の中央孔よりやや上辺に小さな、いわゆる補修孔があるが、何の必要から施されたのか？

Ⅱ. 直径が5cm内外と比較的大きく、その反面、中央孔がきわめて小さなものが発見されているが、これで耳朵に挿入することができたのか？

Ⅲ. 玦状耳飾の表裏は？ など玦状耳飾の形状自体にもなぞの部分が多い。

現在入手し得る資料をもってこれら数々の疑問に明快に答えることは困難だが、この厚い壁の中からわずかでも問題解明への手がかりをつかむため、いままで、ほとんど取り上げられたことのない九州の玦状耳飾を紹介し、いくつかの考察を試みてみたい。

(本論文は立正大学坂詰秀一教授のご指導で執筆した卒業論文の要約にその後、多少の補足を加えたものである。)

2. 九州発見の玦状耳飾とその遺跡

現在までのところ九州においての玦状耳飾は、筆者の知る範囲において25遺跡、39個が出土している。しかし、このなかにはかならずしも発見地の所在が明確でなく、詳細な報告がなされていないために資料として扱えなかったものがある。従ってこれらを除いた17遺跡28個について以下に紹介する。

鹿児島県

1. 草垣島遺跡(第Ⅰ図1)

草垣島は川辺郡笠沙町に所在する。枕崎の南西およそ90kmの海上に浮かぶ10数個の小さな群島である。この遺跡は1971年(昭和46)枕崎航路標識事務所の江崎文夫氏が草垣島ヘリポート造成現場で発見した。

採集遺物には土器として縄文式土器、弥生式土器、阿高式土器などそれぞれに類似の縄文式土器の他に、弥生式土器、須恵器などが出土している。石器には打製石斧、石鏃、砥石、石錘、チャート、メノウ片などが出土している。玦状耳飾は長さ6.8cm、厚さ0.72cmの半分破損したもので、2つの補修孔を有し、両面より穿孔してある。外周は鋭く尖り、外見上、石包丁をおもわせる。復元形態

は円形もしくは楕円形である。色調は半透明の淡緑色である。石質はヒスイであるが中にはソーダ雲母も含まれている。採集品のため伴出土器は不明である。(現在、枕崎市立図書館に展示してある。)

2. 田の脇遺跡⁽¹³⁾(第Ⅰ図2)

種子島西之表市現和に所在する田ノ脇遺跡の玦状耳飾は県の農耕土地区画整理中に発見されたもので長さ3.5cm、厚さ0.4cmの半分破損したものである。破損部付近には2つの補修孔がもうけられており、互いに両方から穿っている。外周は丁寧に研磨され、断面はやや蒲鉾状を呈す。草垣島発見のものより小さいが形態的には似ており復元形態は楕円形に近い。色調は茶褐色を帯びている。石質は不明である。採集品のため共伴土器は判明しないが、周辺には多数の石器と条痕に細かい貼りつけ凸帯を施した縄文土器などが検出されている。その他の詳細は判明しない。(現在種子島西之表市博物館に展示してある。)

3. 鳥越遺跡(第Ⅰ図3)

川辺郡坊津町坊に所在する鳥越遺跡は、入り江の多い坊津町においては比較的起伏の穏やかなところにある。海岸線より約100mほど登りつめたところの畑地にある。

玦状耳飾が発見された地点は、この畑地のまん中を流れる硯川の川縁より当時、井戸掘り作業を行っていたさいにたまたま発見されたものである。長さ4.0cm、厚さ0.4cmの半分破損したもので、復元形態はちょうど正三角形になる。破損部のところに一つの補修孔があり両方から穿孔され貫通している。外周は丁寧に研磨されている。色調は濃い茶褐色で美しいものである。共伴土器などその他の詳細は判明しない。この三角状のものは九州ではいまのところ他に類例がなく貴重な資料である。(現在、坊津町立民俗歴史資料館に展示してある。)

4. 西之園遺跡⁽¹⁴⁾(第Ⅰ図4)

川辺郡笠沙町赤生木に所在する西之園遺跡は、北側に下降傾斜する台地先端近く(標高9m)にあり、海に接している。県道31号線新設改良工事に伴って1977年(昭和52)に鹿児島県教育委員会により発掘調査された。

土器には早期の押型文土器、前期の寒ノ神B式土器、轟式土器、春日式土器、このうち轟式土器を主体とする。その他、後期の市来式土器、北久根山式土器、西平式土器、晩期の黒川式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、削器、石錐、砥石などが出土している。また県内では珍らしく土偶?の残片も出土している。

玦状耳飾は縄文時代前期と後期の遺物の混在する明茶褐色粘質土層中より出土しており長さ4.8cm、厚さ0.4cmの半分破損したもので復元形態は円形になる。破損部付近には一つの補修孔がもうけられ、両面より穿孔されている。またその補修孔には紐ずれらしい痕跡が認められる。色調は青緑色で美しく石質は軟玉である。(現在、鹿児島県立博物館に展示してある。)

(15)

5. 南田代遺跡(第Ⅰ図5)

川辺郡川辺町田部田に所在する南田代遺跡は、吹上浜砂丘に注ぐ万ノ瀬川の中流に位置し、ちょうど川が大きく湾曲したところの平坦な畑地にある。この遺跡は筑波大学生東和幸氏によって以前から多数の石器や縄文土器などの散布が知られていた。土器には前期の曾畑式土器や古墳時代の成川式土器が出土している。石器は石鏃をはじめ石匙、石錐、剝片などで土器にくらべ石器の出土量が大半を占める。

块状耳飾も東和幸氏によって採集されたもので、長さ4.2cm、厚さ0.6cmの半分破損したものである。復元形態は円形になる。断面はやや厚く、器面にはいくらかの傷が付けられている。色調は若草色でヒスイと思われる。共伴土器は採集品のため判明しない。

(16)

6. 上焼田遺跡(第Ⅰ図6)

日置郡金峰町宮崎に所在する上焼田遺跡は万ノ瀬川の支流である掘川によって形成された田布施平野に舌状に伸びた低台地の北側傾斜面にある。本遺跡は1976年(昭和51)に鹿児島県教育委員会により発掘調査された縄文前期の轟式土器を主体とした遺跡である。土器は上記の轟式土器をはじめ同じく前期の塞ノ神式土器、春日式土器、晩期の黒川式土器、少量の弥生式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、石錐など多数出土している。その他、軽石製陰石や2体の人骨も出土している。

块状耳飾は2点出土しているが、一点は一部が欠損しており块状部が確認できず、また形態的にも块状耳飾としては容認しがたいものである。しかし、いわゆる指貫形块状耳飾や栓状耳飾とすることも考えられるが、ここでは扱わないことにする。もう一点は長さ3.7cm、厚さ0.7cmの半分破損したもので、中央孔は1.5cmと比較的大きく互いに両面より穿ってある。復元形態は円形になる。器面はよく研磨され滑らかである。色調は乳白色を呈した滑石製のものである。共伴土器は轟式土器である。(現在、鹿児島県立博物館に展示してある。)

(17)

7. 阿多貝塚(第Ⅰ図7)

日置郡金峰町宮崎に所在する阿多貝塚は、薩摩半島の西岸、吹上砂丘の後背地に伸びる丘陵上に位置している。先述した上焼田遺跡は水田を隔てた西側の台地に位置している。

かつて轟式土器を本貝塚の名称をもって阿多式土器と呼んだこともある。今回は史跡整備の一環として1977年(昭和52)金峰町教育委員会により発掘調査されたものである。

その結果、土器には早期の押型文土器、前期の塞ノ神A式土器、轟式土器、曾畑式土器、中期の阿高式土器、並木式土器、後期の市来式土器など数多く出土している。石器には、石鏃、石匙、石錐などがあり、その他、骨角器などが出土している。

块状耳飾は長さ4.7cm、厚さ0.5cmの半分破損したもので、復元形態はほぼ円形になる。断面は偏平で器面はよく研磨され滑らかであるが、所々に抉られた部分がみられる。破損部付近には2つの補修孔がもうけられ共に両面より穿っている。また一つの補修孔には西之園遺跡でみられたもの

と同様に紐ずれらしい痕跡がある。色調は灰緑色を呈した蛇紋岩である。これは第3層の黄褐色火山灰土層（アカホヤ）より轟式土器、曾畑式土器の混在する層から出土している。

8. 今木場遺跡⁽¹⁸⁾（第Ⅰ図8）

日置郡吹上町今木場に所在する今木場遺跡は薩摩半島のほぼ中央部に位置した四方を山に囲まれ、南北方向に長い帯状の盆地上、標高320mのところであり、鹿児島市との境界付近にあたる。遺跡は平坦な畑地にあり多数の遺物が採集されている。土器では早期の石坂式土器、前平式土器、変形燃糸文土器、押型文土器、前期の平椀式土器、寒ノ神式土器、轟式土器、曾畑式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、削器、石錐、その他、珍しい遺物としてトロトロ石器が出土している。玦状耳飾は本田道輝氏（鹿児島大学助手）により採集されたもので、長さ2.2cm、厚さ1.0cmの半分破損したものである。これは古墳時代後期にみられる金環に似て肉が厚く丸みをもった小型のもので、いわゆる金環形玦状耳飾と呼ばれるものである。色調は美しい濃緑色を呈しており硬玉製と思われる。共伴土器は採集品のため判明しない。

9. 荘貝塚⁽¹⁹⁾（第Ⅱ図9）

出水市荘に所存する荘貝塚は高尾野川と野田川にはさまれた扇状地先端部、荘中学校に隣接した東斜面畑地にある。本貝塚は1968年（昭和43）池水寛治氏により発見され、1973年（昭和48）には池水寛治氏による学術調査がなされている。その後、1978年（昭和53）には出水市教育委員会により発掘調査が行われた。その結果、遺物として土器は早期の押型文土器、前期の轟式土器、曾畑式土器、その他、須恵器、青磁などが出土している。なお主体となる土器は轟式土器である。石器には石鏃、石錐をはじめ、双角状石器、円盤状石斧、その他、骨製品などがみられる。玦状耳飾は、これまで8点の出土が知られるが報告書では4点だけしか示されていない。この4点のうちでも3点は未成品であるためここでは扱わないものとする。73年の調査では3点が出土しているが、これは玦状耳飾の特徴を明確に表わしている（未発表）。この8点の大部分は乳白色を呈した大理石製のもので、轟式土器に共伴している。

報告書に記された4点のものうち1点は長さ2.2cm、厚さ0.3cmの半分破損したもので、断面がやや角ばっており研磨が十分でない。復元形態はほぼ円形になる。本貝塚での玦状耳飾の発見数は多く県内の他の遺跡とは隔絶した特色を示し形態的にもさまざまなものが出土している。

10. 倉園遺跡⁽²⁰⁾（第Ⅱ図10）

曾於郡志布志町内ノ倉に所在する倉園遺跡は、志布志町前川の中流、市街地より直線で約10km、八野線を約12kmの行程にある池野台地末端に立地している。昭和39年、ブルドーザーによる畑地の地下げの際発見された遺跡である。採集遺物として土器では早期の吉田式土器、前平式土器、中期の岩崎下層式土器、後期の指宿式土器、鐘ヶ崎式土器などが出土している。石器には石皿、局部分製石斧などがある。⁽²¹⁾

玦状耳飾は当時、志布志高校に在学中であった前田昭君により採集されたもので九州唯一の完形品である。長さ4.8cm、幅5.2cm、厚さ0.6cmの扁平で、ほぼ円形に近い形状である。中央よりやや外周端部より約1cmの円孔がみられ、これより外周端部へ幅約0.2cmの切れ目がぬけている。円孔は両側より穿ってある。色調は青緑色の硬玉品である。共伴土器は採集品のため判明しない。

熊本県

1 1. 松ノ木坂遺跡⁽²²⁾ (第Ⅱ図11)

上益城郡矢部町に所在する松ノ木坂遺跡は田小野川と河内川に挟まれた標高約650~700mの一連の台地上に位置している。遺物には土器として、前期の塞ノ神式土器、轟式土器、それに瀬戸内地方における里木Ⅰ式土器などが出土している。石器には石鏃、石錐、滑石製垂飾などが出土している。

本遺跡の玦状耳飾は全体の3分1を欠いており、側面形は12mmと厚く、切れ目部分が角をおとしたような長方形である。中央の孔は両方から穿っている。復元形態はほぼ正円形で、いわゆる指貫形玦状耳飾と呼ばれているものである。色調は灰緑色不透明で、石質は滑石製である。採集品のため共伴土器は判明しない。

1 2. 轟貝塚⁽²³⁾ (第Ⅱ図12)

宇土市宮庄に所在する轟貝塚は、宇土半島基部から北に延びる低丘陵の端に位置する。1919年(大正8)に浜田耕作、1920年(大正9)長谷部言人、1958年(昭和33)松本雅明、1966年(昭和41)江坂輝弥氏等によって調査された。

遺物には土器として、本貝塚出土の土器を標識とした前期の轟式土器や中期の並木式土器、阿高式土器、後期の北久根山式土器などが出土している。石器では石鏃、石匙、石錐、磨石などがある。その他、数体の人骨と貝輪や猪牙製装飾品が出土している。本貝塚の玦状耳飾は1920年(大正9)⁽²⁴⁾に長谷部言人氏により採集されたもので2点がある。2点とも半分破損しており復元形態はほぼ円形になると思われる。色調は乳白色で、石質は大理石製である。共伴土器は判明しない。

長崎県

1 3. 下本山岩陰⁽²⁵⁾ (第Ⅱ図13)

佐世保市下本山町に所在する下本山岩陰は相浦川の下流の砂岩壁を浸蝕して形成されたもので、上流には泉福寺、岩下など洞穴遺跡の多いところである。本遺跡は1970年(昭和45)に佐世保市教育委員会により調査された。その結果、土器として縄文前期の轟式土器、曾畑式土器、中期の阿高式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、石錐、石槍などがあり、その他、貝輪や釣針、玉類などがみられる。本遺跡の玦状耳飾は半分破損はしているものの長さ6.4cmと大きなもので、復元形態は長楕円形とでも呼ぶべきか下方へ長く延びた特殊な形態である。これは全国でも珍らしく貝を素材として作ったものである。共伴土器は不明とされる。

福岡県

14. 新延貝塚⁽²⁶⁾ (第Ⅱ図14)

鞍手郡鞍手町に所在する新延貝塚は西川の河口から約10km遡った所で、遠賀川の西方約3kmにある腰山連山の間をぬって西川に注ぐ北田川、南田川の堆積作用によってできた一種の扇状地に立地している。本貝塚は1964年(昭和39)、65年(昭和40)と過去2回にわたって調査が行なわれている。玦状耳飾は1979年(昭和54)鞍手町教育委員会により発掘調査された際出土したもので、遺物には土器として縄文前期の轟式土器、曾畑式土器、瀬戸内系の前期彦崎ZⅠ式土器、中期の船元式土器、福田C式土器、後期の中津式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、石錘、石銚などが出土している。その他、サメ歯の垂飾品、貝輪などがみられる。

玦状耳飾は長さ4.1cm、厚さ0.75cmの半分破損したもので復元形態はほぼ円形になるものと思われる。器面には2つの両面より穿った補修孔がもうけられているが、一つは貫通していない。色調は乳白色を呈しており、石質は大理石製のものである。本貝塚出土の玦状耳飾はK区第Ⅱ層(第Ⅱ文化層)より中期の船元式土器に共伴している。

15. 沖ノ島四号洞穴⁽²⁷⁾ (第Ⅱ図15)

沖ノ島は玄海灘に浮かぶ孤島で、東西1km、南北約0.5km、周囲約4.0km、である。福岡県宗像郡大島村に所属し、宗像郡神湊の北北西約60kmにあたる。西に対馬、南西から南に杓岐、北九州、東に山口県をほぼ等距離にのぞみ、古来海上交通の際の目標として重要な位置を占めてきた。四号洞穴遺跡は島の南、沖津宮のすぐ北側にあり、奥行約8m、幅2mの細長い形をした洞穴である。この島の学術調査は宗像大社復興期成会が1954～72年、3次にわたり行ない祭祀遺跡の実体が明らかにされた。遺物には縄文土器として、前期の曾畑式土器をはじめ中期の船元式土器、晩期の黒川式土器などが出土している。石器には石鏃、石匙、削器などの他、骨角器がある。

玦状耳飾は長さ約3.2cm、厚さ約0.6cmで3分2を欠いている。復元形態は前述の下本山岩陰出土のものと同様、下方が下へ長く延びたいわゆる長楕円形になるものと思われる。石質は粘板岩製のものである。共伴土器は判明しない。

大分県

16. 石原貝塚⁽²⁸⁾ (第Ⅱ図16)

宇佐市青森町に所在する石原貝塚は国東半島のつけ根の最も西端にあたり、寄藻川と向野川の合流点をのぞみ、田笛川との間に挟まれる封戸台地の西縁下に形成された標高3mの微高地上に立地する。

本貝塚は大分県教育委員会により1974年(昭和49)に調査された。遺物には土器として、縄文後期の鐘ヶ崎式土器、中津式土器、福田KⅡ式土器などがある。石器には石鏃、石匙、石錘、石錘などがある。その他、土偶や2体の埋葬人骨が検出されている。

玦状耳飾は長さ4.0cm、厚さ0.3cmの半分破損したものである。復元形態はほぼ楕円形になる。

器面は全体によく研磨され、断面は錯向したレンズ状をなす。色調は灰白色で石質は石灰岩製である。この玦状耳飾の出土層位は第Ⅴ層の砂礫層中であり、この層の上半部より鐘ヶ崎式土器が出土している。大分県教育委員会坂本嘉弘氏によると「近くを流れる奇藻川は以前から再々氾濫すること⁽²⁹⁾で知られるが、玦状耳飾はこの氾濫により移動してきた可能性もある」という。従って後期の土器に伴うものかは判断しがたい。

⁽³⁰⁾ 17. 川原田洞穴（第Ⅱ図17）

速見郡山香町広瀬に所在する川原田洞穴は国東半島の基部を南北に貫く南側の溪流、八坂川の流域に位置した角礫を混合する集灰岩の基部を旧河川が浸食して形成した岩陰である。発掘は日本考古学協会洞穴調査委員会が主体となって実施し、1963年（昭和38）に行われた。

出土遺物には土器として縄文早期の田村式土器、前期の塞ノ神式土器、轟式土器、曾畑式土器などがあり、石器には細石鏃や石匙などがある。

玦状耳飾は3点がみられるが、このうち1点は硬玉製のもので長さ約2.6cm、厚さ約0.3cm程の中央に約0.5cmの中央孔を有する。器面は精細に研磨されている。復元形態はほぼ円形になる。色調は淡緑色を呈しており美しいものである。

2点は鹿角製のもので1点は破損しているが、もう1点は完形品である。これは栓状もしくは指貫形玦状耳飾と呼ばれているもので攪乱層中に早期土器と混じて出土したが、はっきりした層位確認はできていないとされる。⁽³¹⁾

3. 玦状耳飾の編年

以上の資料を参考に九州に於ける玦状耳飾の編年について検討してみると表1でもわかるように玦状耳飾出土遺跡に於いて最も多くみ出されている土器に轟式土器がある。この土器は有明海沿岸を中心に九州全域に広まり、最近では南西諸島は沖縄にまで分布していることが明らかにされているが、福岡県新延貝塚での例を除けば、鹿児島県の西之園遺跡、上焼田遺跡、阿多貝塚、荘貝塚では玦状耳飾と共伴していることはほぼ確実である。

また採集品のため層位確認がなされなかった遺跡においても、その大部分は轟式土器がみられる。したがって九州における玦状耳飾の編年は縄文時代前期、より正確に言うなら前期後半に位置づけられると思われる轟式土器⁽³²⁾に共伴するものと考えてよいのではないだろうか。これらを念頭において次に玦状耳飾の形態と起源の問題点について最近における諸説をふまえながら以下論を進めていきたい。

4. 形態と起源

一般に玦状耳飾は環状でかつ偏平な下部に切れ目を有するものを言うが、この概念とは若干異なり環状をなさないものが全国にはいくらかみられる。以下に紹介すると岡山県浅口郡里木貝塚例⁽³³⁾などにみられる中央孔が著しく上にあり切れ目が下へ長く延びた長楕円形のものから東北地方を中心

に普遍的にみられる三角形のもの、さらに山陰地方の崎ヶ鼻で代表される美保湾周辺に分布する弥生時代の石包丁状のものなどがある⁽⁸⁴⁾。これら特徴をもつ玦状耳飾は関東を中心として周辺地域の前期末以降にみられるものである。このうち東北地方を中心とした青森県西津軽郡石神貝塚⁽⁸⁵⁾で代表される三角状のものは愛知県宝飯郡稲山貝塚⁽¹¹⁾を南限とし、それ以西での発見はいまのところ皆無であるにもかかわらず、これを一挙に飛び越えて、九州の最南端に登場しているのはどのように考えればよいのだろうか。当時の東日本との関係を示唆するものとしてこの坊津町鳥越遺跡出土のものは興味深い資料である。

次に玦状耳飾の特徴の一つでもある断面形が扁平をなさないものがある。これは栓状もしくは指貫状を呈するものであるが、一応、玦状耳飾としての範ちゅうに含まれるものである。発見例として、茨城県稲敷郡興津貝塚⁽⁷⁾より骨製のもの一点と長野県村川村有明山社遺跡⁽¹¹⁾においては滑石製のもの一点が、大分県速見郡川原田洞穴からは鹿角製2点、熊本県下益城郡松ノ木坂遺跡では滑石製1点、などがある。なお、この栓状もしくは指貫形のものは従来、玦状耳飾の初源形態として注目されてきたが、⁽³⁶⁾前述の興津貝塚や有明山社遺跡においては前期後半の土器に共伴している事実から考えると大分県川原田洞穴や熊本県松ノ木坂遺跡のものは前期後半の縄文式期に存在した可能性が高いと考える。

その他に断面が円形に近く、直径3cm前後と小型で肉厚なものがある。いわゆる古墳時代の金環に類似したものである。これは九州では、鹿児島県日置郡今木場遺跡の採集品1例が知られている。この金環形のものは、富山県新川郡極楽寺遺跡では関東地方の前期初頭に対比される花積下層式土器と同時期と思われる土器に共伴し、静岡県庵原郡木島遺跡、宮城県紫田郡上川名貝塚、福島県原町市滝ノ原遺跡などでは大理石製のものが、やはり、前期初頭の土器に伴っている⁽⁹⁾。このように前期初頭のものは古墳時代の金環のように肉が一般的に太いという類似点がある。しかし、岐阜県村山遺跡⁽¹¹⁾や長野県舅屋敷遺跡においては、断面の丸みを帯びたものや肉薄なものが共に出土しているという。このような例を考慮すると、今木場遺跡出土の肉厚な金環形のものも採集品ではあるが、前期初頭に存在したものではなく、やはりこれは縄文式期に存在した可能性が高いと考える。すなわち九州発見の玦状耳飾においてはその形態の変遷はなく、縄文式期における「形式の違い」に過ぎないものとする。

それでは一体、九州の玦状耳飾の起源はどこか？⁽⁸⁾慶応大学江坂輝弥教授は「前期初頭以降、ほとんど日本全域に広がりを見せる玦状耳飾は、今日もフィリピン、ボルネオなどの東南アジアの未開民の間に愛用されているもので、中国の長江流域、江南方面からわが国へ渡来したものと考えるのが、もっとも妥当と思われる」と述べ、さらにまた「最近発見された植物遺存体のヒョウタン、ウルシ、カジ、緑豆などの渡来植物と共に玦状耳飾も長江南部より東シナ海を渡り西九州へ直接渡来した蓋然性が強い、実際、玦状耳飾は長江南部の地域では各地に発見例が知られ、BC約5000年とされる浙江省余姚県河姆渡遺跡からも発見されている。」との御意見である。これは興味深い考察である。この視点から九州出土の分布をみるとうなずけることが多い。⁽³⁷⁾

しかし、関東地方の早期中頃の花輪台式土器に伴出した猪牙製のものや、⁽³⁸⁾前述した花積下層式土

器に伴出する玦状耳飾例、福井県三方湖に近い縄文人のタイムカプセルと注目される鳥浜貝塚⁽³⁹⁾においても前期初頭の北白川下層Ⅰ式土器及びⅡ式土器に伴出した7個の玦状耳飾の例などを考慮すると九州より以東に古いものが多くみられ、九州のものは前期後半の壱式期に多く存在している点から大陸よりもたらされたと考ええるよりも、現段階ではむしろ、九州以東よりもたらされたと考えた方が妥当ではなかろうか？。九州以東のどこに起源地があるかという点については今後の研究に待ちたい。

ところで、海外においては台湾の東岸にある「馬武窟」⁽³⁸⁾の箱式棺内から発見されたわが国の玦状耳飾に酷似したものをはじめ、台湾や東南アジアには環状の玦状耳飾の外周に突起を付けた、いわゆる有角玦状耳飾⁽⁴⁰⁾と称されるものがあるが、わが国の玦状耳飾と比較してだいぶ時代が下降するものであることから、その関連性は薄いとみられる。

5. 材質について

玦状耳飾はそもそもどのような素材をもとに製作されていたかという点、普通、石製のものが一般的だが、その他に骨や土で作ったものがある。九州でも石製が一般的だが、長崎県佐世保市下本山岩陰ではイタボガキで作った貝製のものがある。これは全国でも類例のない珍しいものである。骨製のものは大分県川原田洞穴より2点、指貫状を呈したものが出ている。土製のものは関東を中心に多くみられるものであるが、九州においてははまだ報告例をみない。

ところで、東北大学芹沢長介教授は、骨製の指貫形玦状耳飾から石製のものへと形態的、素材的変遷を示唆しているが、富山県教育委員会藤田富士夫氏は、富山県富山市にある小竹貝塚例を参考⁽³⁶⁾に素材の違いを原因とする形式の相違に過ぎないことを述べている。⁽⁴¹⁾

九州においても、これら素材の相違による時期的な変遷はないように思う。これは前述したように壱式期における素材の違いに過ぎないと考えた方がよいのではないだろうか。

6. 半欠品の着装利用

玦状耳飾は大阪府藤井寺市国府遺跡（前期）や岡山県倉敷市中津貝塚⁽⁴¹⁾（晩期）での成人女性人骨の耳もと付近からの発見により耳飾であることが判明したのは周知の事実である。

その着装法としては東南アジアなどの未開民の民俗例により、穴をあけた耳朶に切れ目を下にして挿入したと考えられるわけだが、これがもし破損して、本来の着装ができなくなった場合でも所有者は執拗に破損品の再使用にこだわった痕跡が見られるのは面白い。当時としては、よほど入手し難い貴重品であったのだろう。

全国出土の玦状耳飾は、半分破損したものが、きわめて多い。九州出土のものも1点を除くすべてのものは半分破損しているものである。このような破損品にはかならずと言ってよいほど1対もしくは2対の破損部付近に補修孔をもうけてある。さらに鹿児島県西之園遺跡、阿多貝塚、福岡県新延貝塚出土のものにはこの補修孔に紐ずれらしい痕跡が見られる。このことからこの補修孔は1対又は更に多く他方と紐で接合し、首飾りなど使用法の転換、2次的利用をはかったものと見方が

成立するが、一方、後期に多く見られるサメ歯の耳飾りの着装法から推論するなら、穿った孔に紐を通して耳朶につり下げ、以前からの習慣を踏襲して耳飾りとして使用したものの見方もまた成立する。

半欠品着装利用法のなぞの解明は興味深い今後の課題であろう。

7. おわりに

九州の玦状耳飾を紹介したうえで、問題点を提起し、いくつかの考察を加えようとする意図とは程遠いものに終わってしまったが、玦状耳飾に関する資料が非常に貧困なことは事実である。

九州での玦状耳飾は前期後半の縄文期に存在したものと考え、九州以東により古い例が多く見ることから、現段階では九州への伝播は東日本より、と私は考えた。

また、その形態、素材の違いは時代的な変遷の過程を示すものではなく、単なる縄文期におけるバリエーションと見た。

だがこれはあくまで乏しい見識と資料からなる推論である。あまり多過ぎる玦状耳飾への疑問の解明のためには、今後、九州における縄文時代前期の様相をくわしく究明するとともに東シナ海地域を含めた幅広い研究が必要だと今、考えているところである。

南九州では一例しか知られていない土製滑車型耳栓や、他の装身具とのかかわりについても考えてみる必要があろう。

本稿の土台は冒頭のべたように坂詰秀一先生ご指導になる立正大学卒業論文である。立正大学院和田好史氏のご助言が卒業論文完成への力強い励ましとなったものだ。またこれは富山県教育委員会藤田富士夫氏の論文から多くの啓示を受けたのが動機である。

慶応義塾大学江坂輝弥先生からは資料収集についてのご指導を数多くいただいた。また、本稿発表の機会を与えてくださったばかりか、かゆい所に手のとどくご指導をいただいたのは河口貞徳先生、上村俊雄先生、本田道輝先生である。本稿末尾を借りて、諸先生方への心からの感謝の気持をお伝えすることを許していただきたい。

資料提供に快く応じてくださったのは、鹿児島県教育委員会、長崎県教育委員会、大分県教育委員会、熊本日々新聞社、枕崎市立図書館、坊津町立民俗歴史資料館、筑波大学生 東和幸氏である。なお今木場遺跡採集の遺物については本田道輝先生のご教示を得た。これらの御協力がなければ本稿執筆は不可能であつたらう。もとより浅学非才、問題点解明の作業の多くが今後の研究と努力にまたなければならないことは明らかである。各位の旧倍のご鞭撻、ご叱責をお願いして筆を置く。

(註)

- (1) 小林行雄, 水野清一編「玦状耳飾」『考古学辞典』東京創元社 1959年
- (2) 樋口清之「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻1号 1933年
- (3) 大野雲外「志摩発見の石環に就いて」『人類学雑誌』第27巻5号 1911年
- (4) 柴田常恵「玦様の石製品に就いて」『人類学雑誌』第32巻12号 1917年
- (5) 浜田耕作『京都大学考古学研究報告書』第2冊 1918年
- (6) 梅原末治「鳥取県下に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史跡勝地調査報告』第1巻
1922年
- (7) 渡辺誠「装身具の変遷」『古代史発掘』2 講談社 1973年
- (8) 江坂輝弥「縄文文化の起源を求めて」『古代史発掘』2 講談社 1973年
- (9) 江坂輝弥「装身具」『日本原始美術』2 講談社 1941年
- (10) 高山純「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」『人類学雑誌』第73巻4号
1965年
- (11) 藤田富士夫「玦状耳飾の素材の在り方について」『信濃』第27巻9号 1975年
- (12) 河口貞徳「草垣島上ノ島の遺跡」『考古学ジャーナル』第66号 1972年
- (13) 河野治雄「草垣島出土の遺物について」『鹿児島考古』第6号 1972年
- (14) 池畑耕一, 長野真一『西之園遺跡』鹿児島県教育委員会 1978年
- (15) 東和幸氏の教示による。
- (16) 出口浩, 池畑耕一『上焼田遺跡』鹿児島県教育委員会 1977年
- (17) 戸崎勝洋, 青崎和憲『阿多貝塚』金峰町教育委員会 1978年
- (18) 本田道輝氏の教示による。
- (19) 池水寛治, 長野真一『荘貝塚』出水市教育委員会 1979年
- (20) 立神次郎, 中村耕治『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会 1978年
- (21) 瀬戸口望「倉園遺跡採集の指宿式土器とその他について」『鹿児島考古』第10号
1974年
- (22) 小畑弘己『赤レンガ』創刊号 赤レンガ出版会 1981年
- (23) 西健一郎「轟貝塚」『世界考古学事典』上 平凡社 1979年
- (24) 浜田耕作『京都大学考古学研究報告』第5冊 1919年
- (25) 麻生 優『下本山岩陰』佐世保市教育委員会 1975年
- (26) 木村幾多郎『新延貝塚』鞍手町教育委員会 1980年
- (27) 橘 昌信「四号洞穴遺跡」『宗像, 沖ノ島』I 1979年
- (28) 坂本嘉弘, 清水宗昭『石原貝塚・西和田貝塚』大分県教育委員会 1973年
- (29) 坂本嘉弘氏の教示による。
- (30) 賀川光夫『大分県の考古学』吉川弘文館 1971年

- (31) 賀川光夫「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』 平凡社 1967年
- (32) 河口貞徳氏の南九州縄文土器編年表を参考にした。
- (33) 梅原未治「史前の玦状耳飾に就いての所見」『日本古玉器雑攻』 吉川弘文館 1971年
- (34) 藤田富士夫「耳栓の起源について — 飾玉の在り方と関連して」『信濃』 第23巻4号
1971年
- (35) 江坂輝弥, 平山久夫, 村越潔『石神遺跡』 ニューサイエンス社 1970年
- (36) 芹沢長介「玦状耳飾」『日本の考古学』 Ⅱ 河出書房 1970年
- (37) 江坂輝弥「渡来植物からみた縄文時代の地域性」『地理』 9 古今書院 1981年
- (38) 吉田 格「関東地方における縄文時代の遺跡と遺物」『関東の石器時代』 雄山閣 1973年
- (39) 森川昌和『鳥浜貝塚』 福井県教育委員会 1979年
- (40) 宋 文薫「台湾蘭嶼発見の石製小像」『国分直一博士古稀記念論集』 考古篇 新日本教育図書 1981年
- (41) 渡辺 誠「玦状耳飾」『世界考古学事典』上 平凡社 1979年
- (42) 河口貞徳「南九州出土の条痕土器 — 吉田村及び知覧町遺跡」『石器時代』1号 1955年

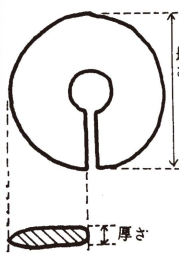
<挿図出典>

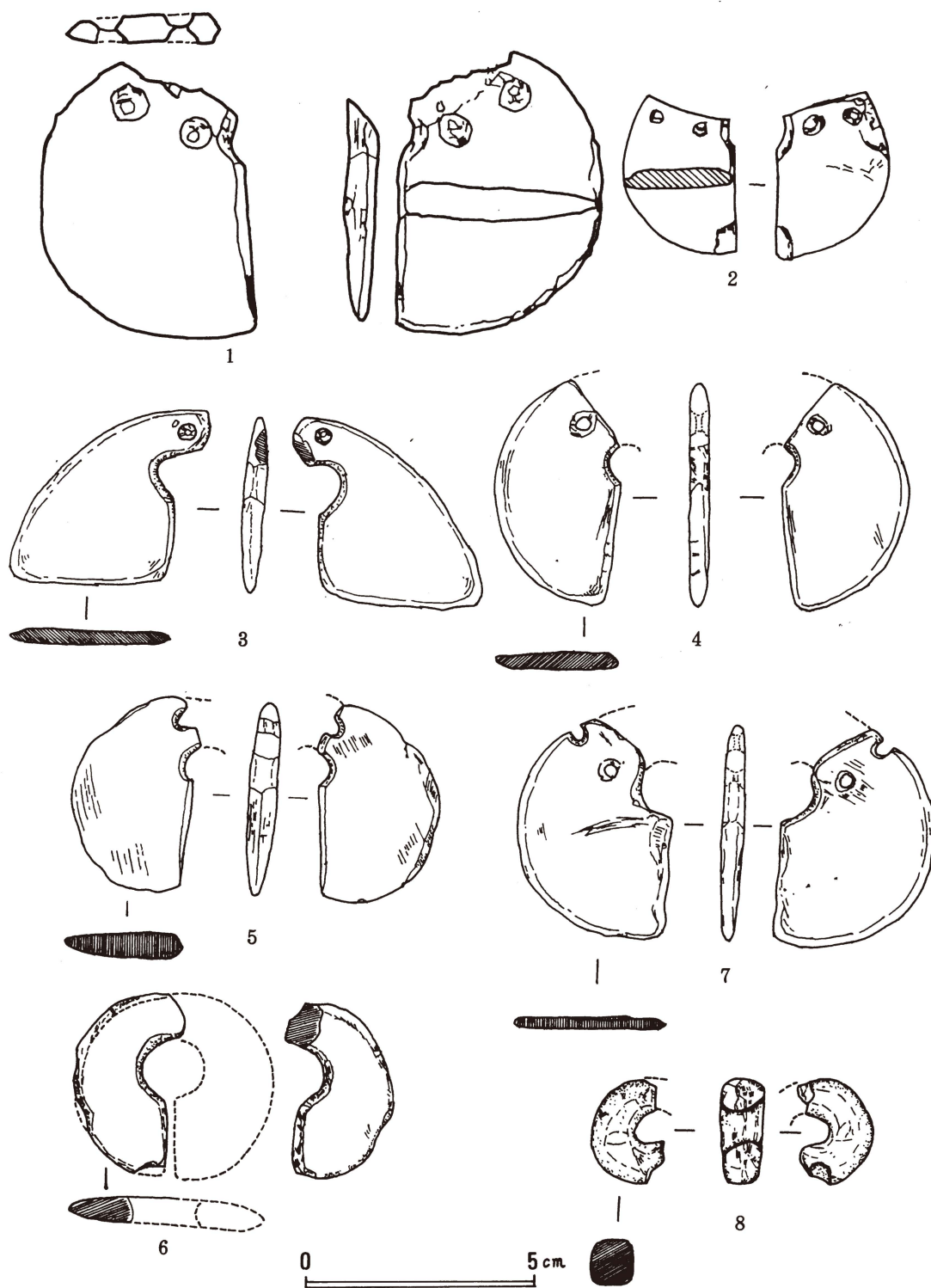
第Ⅰ図-1	註(2)
〃 -2	(13)
〃 -6	(16)
第Ⅱ図-9	(19)
〃 -10	(20)
〃 -11	(22)
〃 -12	(24)図版よりトレース
〃 -13	(25)
〃 -14	(26)
〃 -15	(27)
〃 -16	(28)
〃 -17	(36)
〃 -18	(33)台湾, 馬武窟出土
〃 -19	(40)蘭嶼イラライラ社出土

块状耳飾出土遺跡土器一覽表Ⅰ

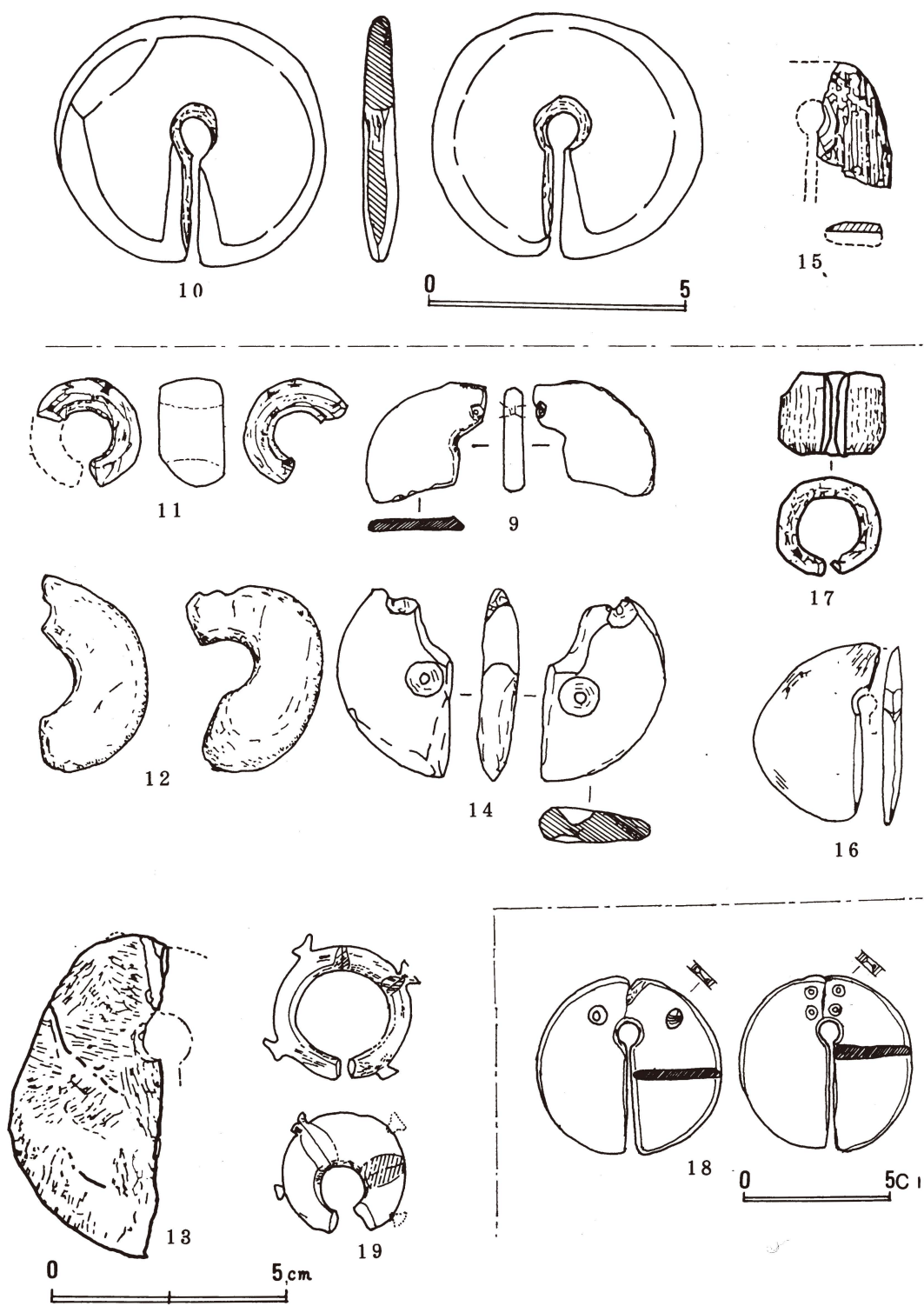
番号	遺跡所在地	土器型式	石	吉	前	押	平	塞	轟	管	春	並	阿	岩	出	指	市	鐘	西	北	御	黒	備考
1	<鹿児島県> 川辺郡笠沙町草垣島								○	○			○									○	◎は主体となる土器
2	西之表市現和田ノ脇								○?														
8	川辺郡坊津町鳥越																						
4	〃 笠沙町赤生木				○		○	◎		○							○			○		○	
5	〃 川辺町田部田							○?	○													○	
6	日置郡金峰町宮崎							○	◎		○											○	
7	〃 〃 〃				○		○	◎	○		○	○					○						
8	〃 吹上町今木場	○		○	○	○	○	○	○														
9	出水市荘				○			◎	○														
10	曾於郡志布志町内ノ倉		○	○										○		○		○					
11	<熊本県> 上益城郡矢部町松ノ木坂							○	○	○													
12	宇土市宮庄							◎				○	○							○			
13	<長崎県> 佐世保市下本山町迎野								○	○			○										
14	<福岡県> 鞍手郡鞍手町新延								○														
15	宗像郡大島村沖ノ島									○												○	
16	<大分県> 宇佐市青森町石原																	○					
17	速見郡山香町広瀬				○		○	○	○														

块状耳飾一覽表Ⅱ

番号	遺 跡 名	長さ(cm)	厚さ(cm)	色 調	材 質	復元形態	伴出土器	備 考	
1	草 垣 島	6.3	0.7 2	淡緑色	ヒ ス イ	楕 円 状	不 明	枕崎市立図書館蔵	
2	田 ノ 脇	3.5	0.4	茶褐色	?	楕 円 状	不 明	西之表市立種子島博物館蔵	
3	鳥 越	3.8	0.8 5	茶褐色	?	三角形状	不 明	坊津町民俗歴史資料館蔵	
4	西 之 薩	4.8	0.4	青緑色	軟 玉	円 形 状	轟 式	鹿児島県立博物館蔵	
5	南 田 代	4.2	0.6	若草色	硬 玉	円 形 状	不 明	東和幸氏所蔵	
6	上 焼 田	3.8	0.7	乳白色	滑 石	円 形 状	轟 式	鹿児島県立博物館蔵	
7	阿 多 貝 塚	4.7	0.5	灰緑色	蛇 紋 岩	円 形 状	轟 式	金峰町教育委員会蔵	
8	今 木 場	2.2	1.0	濃緑色	硬 玉	円 形 状 金 環 形	不 明	本田道輝氏所蔵	
9	荘 貝 塚	2.2	0.3	褐 色	大 理 石	円 形 状	轟 式	1978年 出水市教育委員会発掘	
10	倉 園	4.8	0.6	青緑色	硬 玉	円 形 状	不 明	前田昭氏所蔵	
11	松 ノ 木 坂	2.4	1.2	灰緑色	滑 石	円 形 状 指 貫 形	不 明	小畑弘己氏所蔵	
12	轟 貝 塚	4.8 ? 4.1 ?	? ?	乳白色	大 理 石	円 形 状	不 明	1919年 京都大学考古学研究 報告 第5冊	
13	下本山岩陰	6.4	?	?	イタボガキ 貝	長楕円状	不 明	1972年 佐世保市教育委員会発掘	
14	新 延 貝 塚	4.1	0.7 5	乳白色	大 理 石	円 形 状	船 元 式	1980年 鞍手町埋蔵文化財調査会 発掘	
15	沖ノ島四号洞穴	3.2	0.2	?	粘 板 岩	長楕円状	不 明	1980年 橋昌信「宗像沖ノ島I」より	
16	石 原 貝 塚	4.0	0.3 5	灰白色	石 灰 岩	楕 円 状	不 明	1979年 大分県教育委員会発掘	
17	川 原 田 洞 穴	2.7	0.3	淡緑色	硬 玉	円 形 状	不 明	別府大学考古学研究室蔵	
		? ?	? ?	白褐色 白褐色	鹿 角 製 〃	指 貫 状 〃	不 明 不 明		

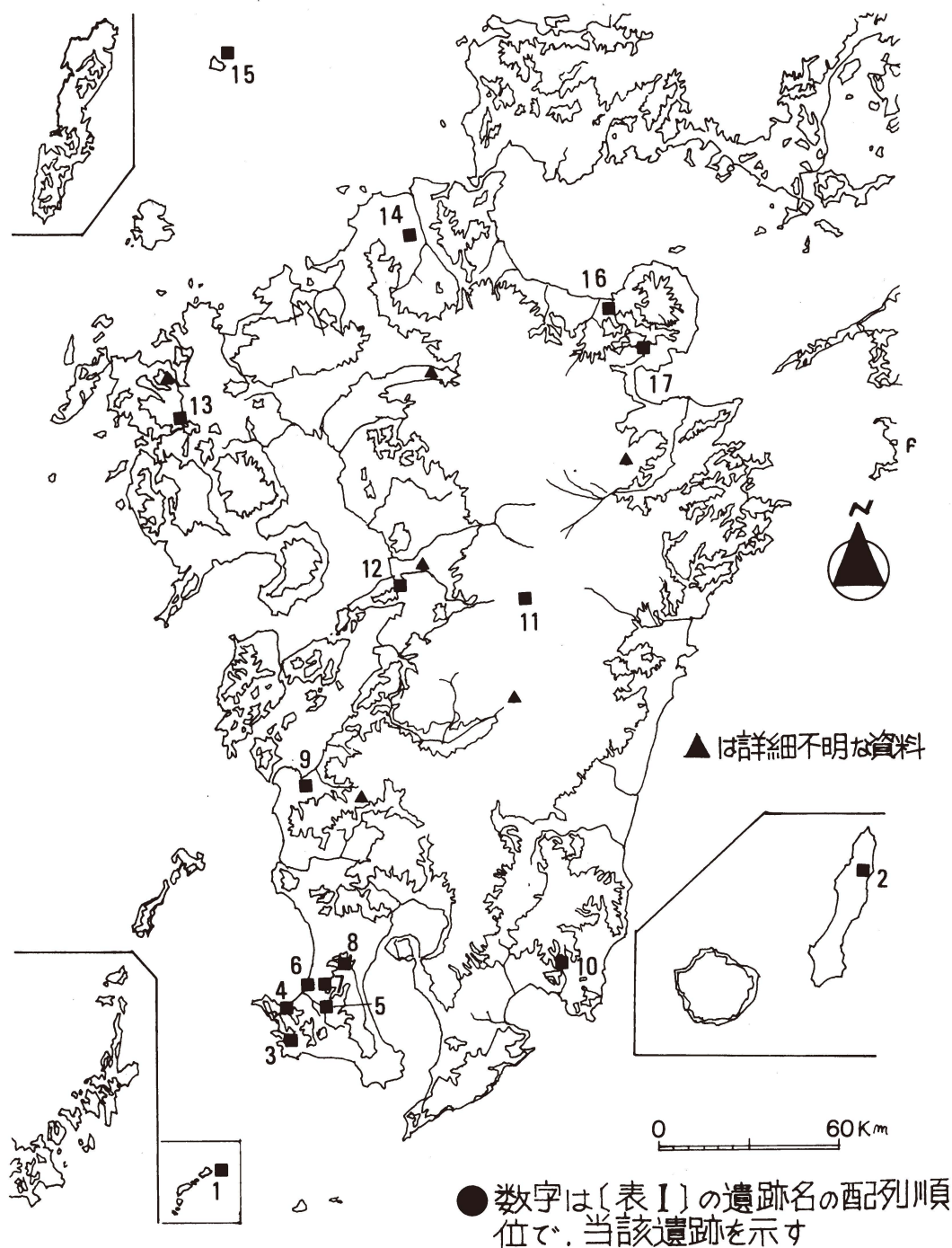


第I図 1. 草垣島 2. 田ノ脇 3. 鳥越 4. 西之園 5. 南田代 6. 上焼田 7. 阿多
 (図番号は表I・IIの遺跡番号に一致) 8. 今木場



第 11 圖 9. 莊 10. 倉園 11. 松ノ木坂 12. 轟 13. 下本山岩陰 14. 新延 15. 沖ノ島
16. 石原 17. 川原田 18. 馬武窟 19. 蘭嶼

玦状耳飾出土分布図



第Ⅲ図